

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：82651

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06899

研究課題名(和文) 海域アジア交易におけるベトナムの役割-ゲアンの考古学調査から-

研究課題名(英文) A study on the role of Vietnam in Maritime Asian trade - Archaeological survey in Nghe An

研究代表者

菊池 百里子(阿部百里子)(KIKUCHI, YURIKO)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構本部・総合情報発信センター・研究員

研究者番号：50445615

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インドシナ半島内陸から海への出口である、ベトナム北中部のゲティン地域において考古学調査を実施し、その成果から、ベトナム沿岸部をハブとした内陸部と海域アジアの交易の様相について考察するものである。

ゲアン省及びハティン省において、2015年12月と2016年9月に発掘調査を実施した。調査では、陳朝から黎朝期のベトナム陶磁器や、明朝から清朝の中国貿易陶磁器が多数出土し、ラム川河口部が、13世紀の陳朝以降、対外交易を行う港であったことが考古学的に確認できた。

また、調査地域における朱印船貿易時代の日本人の活動を示す資料等を確認し、日越交流史研究を進展させる成果を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：I conducted an archaeological survey in the Nghe-Tinh region of North Central Vietnam, which is the outlet of a river that flows through the inland part of the Indochinese Peninsula. Based on the archaeological results, I will consider aspects of trade between inland and Maritime Asia that used the coastal area of Vietnam as a hub.

I conducted an excavation survey in Nghe An and Ha Tinh provinces during December 2015 and September 2016. In these surveys I excavated many pieces of trade ceramics from the Tran dynasty to the Le dynasty and from the Ming dynasty to the Qing dynasty. These ceramics confirmed archaeologically that the mouth of the Lam River was a port for foreign trade from the time of the Tran dynasty in the 13th century.

In addition, I obtained a lot of information, showing the activities of Japanese merchants in this area during the Red-seal ship trade era, contributing to the progress of research into the history of interaction between Vietnam and Japan.

研究分野：ベトナム考古学

キーワード：インドシナ半島 大越国 考古学 朱印船

## 1. 研究開始当初の背景

長い海岸線を持つベトナムの沿岸部、なかでも大きな河川の河口部には、古くから港が成立していた。ベトナム北部では 10 世紀に大越国が成立し、ベトナム中部にはチャンパー民族の国 (~1471 年) があった。本研究の調査フィールドであるゲアン省、ハティン省 (以下、ゲティン地域) は、大越国の南の境界線に近く、12 世紀以降カンボジアからたびたび侵攻を受けていた。また、ゲティン地域は、インドシナ半島内陸部から南シナ海交易圏への出口でもあり、大越国にとっては南の要衝である。

大越国の史書『大越史記全書』1349 年 (陳裕宗紹豊 9 年) の条に、李朝期 (1009 ~ 1225 年) からあった港として、「雲屯」や「濱州」があげられている。「雲屯」は現在のクアンニン省ヴァンドン県であり、「濱州」はゲティン地域である。また、ラム川河口のクアホイは、ベトナムの 15 世紀の史書『抑齋遺集』に「会統」と記され、外国人が立ち入ることができた港のひとつであった。

アジア交易ネットワークが活況を呈する 17 世紀には、ベトナム北部は「トンキン (東京)」とよばれ、中国や東南アジア諸国の商人に加え、日本やヨーロッパの商船が頻りに寄港していた。『異国日記』には、日本の有力な朱印船貿易家である角倉氏の船が「又安」(ゲアン) の「興元」(フングエン) にたびたび渡航し交易を行っていたことが記されている。

このように、大越国にとってゲティン地域は対外的に非常に重要な地であることは文献史研究から指摘されてきたが、これまで当該地域において考古学調査はほとんど行われてこなかったため、その交易活動を具体的な考古資料から明らかにする研究は実施されてこなかった。1990 年代初頭に日本人陶磁器研究者がラム川河口部の遺跡、遺物分布調査 (踏査) を実施し、13 ~ 15 世紀の中国やベトナムの陶磁器片の分布を確認しているが、その後の考古学調査はない。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、インドシナ半島内陸部を流れる河川の出口であるベトナム北中部のゲティン地域において考古学調査を実施し、その成果から、当該地をハブとした内陸部と海域アジアの交易の様相について研究するものである。交易品の生産、流通、消費の流れにスポットを当て、インドシナ半島を横断する東西回廊の海への出口としてのゲティン地域の役割を明らかにすることを目的とする。

(2) ラオスとの国境、チュオンソン山脈から発する大河であるラム川流域において考古学調査を実施することで、ゲティン地域からラオスへ至るルートの重要性を明らかにする。また、ゲアンが朱印船の寄港地であっ

たことは史料に記されているが、それを示す具体的な考古資料はこれまで提示されていない。本研究は、ベトナム北部における朱印船の交易様相を解明する嚆矢となる意義を有する。

(2) これまで研究代表者は、大越国の対外貿易港ヴァンドンや、17 世紀に外国人居留地として栄えた華人街フォーヒエンにおいて発掘調査を実施してきた。一連の考古学調査の成果から、ヴァンドンが陳朝期 (1225 ~ 1400 年) の中国と東南アジアを結ぶ中継貿易港であったこと、黎朝前期 (1428 ~ 1527 年) にはヴァンドンは、主にインドネシアに向けて大越国の商品を輸出するための玄関として機能していたこと、フォーヒエンは、17 世紀後半以降に華人街として栄えるのであり、朱印船の寄港地や VOC トンキン商館 (1637 年設置) の所在地ではなかったこと、などを指摘してきた [菊池 2017]。これらの研究成果は、文献史料に依存してきたアジア交易ネットワークにおける大越国の交易様相や対外政策の解明に、具体的な考古資料を提示するものであった。本研究では、ゲティン地域と、同時代の港であるこれらヴァンドンやフォーヒエンの港の研究成果とを比較し、グローバル・ヒストリーの視点から考察することで、ゲティン地域の海域アジア交易における重要性や役割を明確化する。

## 3. 研究の方法

(1) ゲティン地域を流れるラム川の流域においてトレンチによる発掘調査を実施する。

(2) そしてこの発掘調査で出土した陶磁器を、ヴァンドンやインドネシア、ラオス、カンボジア、沖縄などで出土しているベトナム陶磁器と比較することで、ゲティン地域を経由した陶磁器流通の背景や様相について考察する。

(3) また、朱印船貿易家である角倉氏は、「東京」の「又安處興元縣復禮社」や「華園社」に赴いて交易をおこなっていたことが文書史料から判明しているが、この興元は、現在のゲアン省フングエン県の可能性が高いことが、2013 年にハノイ国家大学と共同で実施した文書調査で判明しており、発掘調査によりゲアンが朱印船の寄港地であったことを確認するとともに、日本人商人らの活動を知るための史資料の調査を実施する。

## 4. 研究成果

(1) ゲティン地域での発掘調査は、2015 年 12 月及び 2016 年 9 月にハノイ国家大学およびゲアン省博物館、ハティン省博物館の協力のもと行った。調査地点は、カー廟地点、ホイトン集会場地点、フックミー廟地点で合計 8 か所のトレンチ調査を実施した。以下にその成果を記す。

#### カー廟地点

ラム川右岸の河口部ハティン省スアンホイ村のカー廟の周辺で2か所のトレンチ調査を実施した。調査では、陳朝から黎朝前期に生産されていたベトナム焼締陶器や白磁、褐釉磁、緑釉磁、青花などのほか、中国泉州壺が出土した。ベトナムの白磁には、見込み部分に「官」の文字が范で施文され、官窯の製品である。

#### ホイトン集会場地点

スアンホイ村ホイトン集会場の敷地内及び周辺で3か所のトレンチ調査を実施した。集会場は17世紀に創建されたといい、発掘調査に先立って実施したスアンホイ村一帯の踏査では、16世紀末に生産された中国・景德鎮窯系の青花や、漳州窯系の青花、ベトナムの焼締陶器鉢などが多数分布していた。発掘調査では、地表面下45～50cmのところ、被熱した黎朝後期以降のベトナム産陶器鉢や焼締長胴瓶などが炭化物や小型の貝類とともに出土した。その下層では17世紀代のベトナムの焼締鉢や白磁、鉄絵印判手菊花文皿が出土した。窯業地ハイズオンで生産されたもので、同様の製品は、長崎や大阪、東京の17世紀後半の遺跡から多数発見されている。また、日本の肥前磁器も出土しており、これらの陶磁器は、朱印船貿易が終了したのちの交易を継承した中国などの商船によって運ばれたと考えられる。

#### フックミー廟地点

ラム川左岸のゲアン省フングエン県フンチャウ村フックミー廟の周辺で3か所のトレンチ調査を実施した。この廟には阮朝の明命帝から啓定帝時代の冊封が納められている。これによると、明命帝の頃、この地の地名は「興元縣復禮社」であり、角倉船の寄港地と一致する。一帯には17世紀代に立てられた碑文が残り、中国からの移住者の子孫が今も居住している。川岸に設定したトレンチでは、地表面下70cmより上層では、18世紀以降に生産された中国福建・広東諸窯の青花が、地表面下70cmから下層では主に17世紀代のベトナムの焼締陶の鉢や長胴瓶、白磁皿などが出土した。

(2) カー廟地点の調査では、陳朝から黎朝前期の陶磁器が多数出土し、またホイトン集会場地点、フックミー廟地点では、黎朝後期(1533～1789年)の陶磁器や16世紀末から17世紀代の中国貿易陶磁器の分布が確認できた。ラム川河口部が、13世紀の陳朝以降、対外交易を行う港市であったことが考古学的に確認できた。

本研究は、海域アジアへ運ばれた交易品、特に陶磁器について、その生産と消費地遺跡の様相や共伴する各国の交易品を比較検討することで、中国や日本とインドシナ半島内陸部を結ぶハブ港としてのゲティン地域の

存在を国内外の学界に提示するものである。よって本研究の成果は、一国のみの地域研究で完結することなく、材料や交易品が流通していた地域の各歴史的現象を同一の時間軸でとらえ、共時・非共時性、地域差から検証することに特色がある。以下に、ベトナム北部の同時期の貿易港の遺跡であるヴァンドンとラム川河口部のホイトン(ホイトン集会場及びカー廟各地点)の出土遺物を比較し、ゲティン地域の港としての役割について考察する。

まず、中国との国境に接し、かつハイズオンという一大窯業地を後背地に持つ港の遺跡ヴァンドンでは、13～14世紀の陳朝の緑釉製品のほか、15世紀の黎朝前期の青花、とりわけ盤などの大型の製品やタイルなども発見され、海域アジア、特に東南アジア島嶼部のマジャパイト王国に向けてベトナム製品を運び出すための港と位置付けられる。同時に、元末明初の中国青磁や白磁も出土しているが、ベトナムの国内ではあまり出土していないため、ベトナム向けに輸出されたものというよりは、中国とインドネシアを繋ぐ中継地としてヴァンドンに運ばれてきた製品と考えられる。

これと比較してホイトンでも、ベトナムの陳朝から黎朝の白磁や褐釉、緑釉製品、青花などが多数出土しているが、ヴァンドンと違い、窯業地ハイズオンやハノイから遠くはなれており、ゲティン地域での交易活動のためにわざわざ運んできた陶磁器と考えられる。また、ヴァンドンでは明末の景德鎮窯系青花が出土するが、漳州窯系の製品は確認できなかった。これに対し、ホイトンは、漳州窯系の青花を多数確認することができる。このことから、ヴァンドンとホイトンでは交易集団の違いがあり、それは黎朝の対外政策と何らかの関係があったのではないかと考えられる。

2012年、ラオス・ビエンチャンの王宮遺跡の発掘調査で、大量の中国陶磁器とともに13～17世紀のベトナム陶磁器が500点以上出土した[清水2015]。これらのベトナム陶磁器は、ヴァンドンからインドネシアに運ばれた陶磁器とは明らかに器種組成が異なり、異なる流通の背景が考えられる。

ベトナム陶磁器の生産地ハイズオンから川を下り、ダイ川から海に出てそのまま海岸線を南下すればゲティン地域に至ることができる。中国を出港した船が、海南島の東南側を通過すれば、たどり着く先はやはりゲティン地域である。ラオスは中国人や日本人が欲した香木などが採集できる地であり、これを後背地として有するものもゲティン地域である。

以上のことから考察すると、ゲティン地域はラオスにおいて多数出土しているベトナム陶磁器などの交易品搬入ルートの一つであった可能性が指摘できる。今後、ラオスで出土したベトナム陶磁器との比較研究を通

じて、ゲティン地域の港としての役割に一定の意義づけが可能となる。

(3) 角倉氏は、家康による朱印船制度開始当初から「東京」や「交趾」向けの朱印状を得て交易活動を行っていたが、1609年に「又安」の河口部で角倉船が沈没したことが記録されている。ラム川河口部は、中国人商人が移住するなど外国人居留地でもあり、ラオス国境に産出する香木や、中国からの商品を探して日本人商人が寄港していたのだろう。

ラム川流域に近い、ハティン省カンロック県の阮一族に伝わる家譜には、沈没した船から救出された日本人の娘が嫁いできたと記録されている。この女性は、1609年に沈没した角倉船に乗っていたと想定できる。この家譜の精読や関係史資料の調査、検証を今後進めることで、交流史研究にあたらな展開をもたらす意義を有する。

また東南アジアの港市に出現した日本人は、「キリスト教弾圧」や「関ヶ原」「鎖国」「禁教」といった日本史の重要なトピックスの結果であり、ゲティン地域の重要性と役割を提示し、その調査研究が進展していくことは、ベトナム史のみならず日本近世史研究にも大きく貢献する意義を有する。

(4) ヴァンドンやフォーヒエンは海域アジア交易史研究の中で、主に欧米の研究機関、研究者らによって盛んに研究されてきたが、ゲアンが彼らの研究の俎上に上がることはこれまでなかった。本研究の成果は、海域アジア交易史に東南アジア大陸部東西回廊の交易という視座を投入するインパクトを有するものであり、今後国際的な研究者コミュニティの中で議論されることで、海域アジアの交易ネットワーク研究におけるブレイクスルーとして、新たなテーマを提起していくものである。

#### <参考文献>

菊池 百里子、雄山閣、ベトナム北部における貿易港の考古学的研究 - ヴァンドンとフォーヒエンを中心に -、2017

清水菜穂、ラオス出土のヴェトナム陶磁、昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.21、2015、109 - 124

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 3件)

菊池 百里子、ラム川流域における発掘調査と出土陶磁器、日本考古学協会総会研究発表、査読有、2017年5月28日、大正大学(東京都・豊島区)

菊池 百里子、菊池 誠一、ベトナム中部

の陶器生産と編年:17-19世紀を中心として、東南アジア考古学会 2016年大会「東南アジアの陶磁器」、2016年11月27日、鶴見大学(神奈川県・横浜市)

Yuriko Kikuchi, The trade ceramics in Vietnam, 8th World Archaeological Congress, 2016年8月30日、同志社大学(京都府・京都市)

〔図書〕(計 1件)

菊池 百里子、雄山閣、ベトナム北部における貿易港の考古学的研究 - ヴァンドンとフォーヒエンを中心に -、2017、243

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

菊池 百里子 (KIKUCHI YURIKO)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構本部・総合情報発信センター・研究員  
研究者番号：50445615

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

ダン・ホン・ソン (Dang Hong Son)

グエン・ヴァン・アイン (Nguyen Van Anh)

グエン・チー・ソン (Nguyen Tri Son)